

開会式では、三大テノール歌手の一人、ホセ・カレーラスのすばらしい歌声を聴く機会がありました。彼自身が白血病の経験者であり、「ホセ・カレーラス国際白血病財団」を設立し、フンボルト大学の小児腫瘍外来も、彼の財団から助成を受けて設立されたものであるとのことでした。

看護セッションで恒例になっているテーマごとに分かれたスモールミーティングでは、「小児がん看護における CNS の役割」や「長期フォローアップにおける看護師の役割」「ターミナルケア」「発展途上国における小児がん看護の現状」などについて活発な討議がされていました。

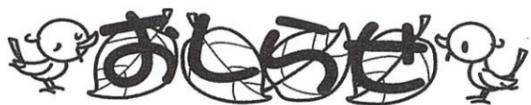
長期フォローアップに関しては、親の会でも一つのセッションをもっていました。8月の研修会で経験者の方が話をしていたことと同じような心理社会的問題が発表されていました。医療の進展により小児がんが治る病気になりつつある現在、社会に復帰していく子どもと家族への先を見越した援助が必要だと改めて感じました。

今後の SIOP の予定

SIOP2009 10月5日～9日(サンパウロ)

SIOP2010 10月21日～26日(ボストン)

各国から臨床ナースが多く参加している国際学会です。臨床で働く方、是非一緒に参加しましょう。



第7回日本小児がん看護研究会について

下記の要領で、第7回日本小児がん看護研究会を行います。詳細につきましては、次号のニュースレターにてお知らせ致します。

記

名称： 第7回日本小児がん看護研究会
 会期： 2009年11月28日(土)～29日(日)
 場所： 東京ベイホテル東急
 会長： 丸 光恵
 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究所)

『小児がん看護』への投稿案内

皆様にご協力を頂き、「小児がん看護」第3号を発行することができました。ただ今第4号を準備中です。さらなる小児がんの子どもと家族のトータルケアのさらなる発展のために、皆様の日々の研鑽の成果を是非ご投稿下さい。尚、投稿締め切りは、平成20年12月20日(必着)とさせていただきます。投稿規定はホームページでご覧頂けます。

会費納入についてのお願い

平成20年度第3回役員会において、「継続して2年以上の会費を滞納したときは会員資格を消失する」ことが正式に決定しました。平成19年度・20年度年会費を未納の方は、今年度末をもって退会扱いになります。至急年会費をお支払いください。

会費振込先：郵便振替口座 00590-9-79689
 口座名称：日本小児がん看護研究会

お問い合わせは、日本小児がん看護研究会事務局までお願いします(TEL/FAX: 0265-81-5186・5184)

Cancer Nursing購読

日本小児がん看護研究会 会員優待のお知らせ
 この度、本研究会にご貢献くださっている Dr. Pamela Hinds のご尽力により、本研究会会員が CANCER NURSING An International Journal for Cancer Nursing (Lippincott, Williams & Wilkins) を格安で入手できるようになりました。詳細につきましては、研究会ホームページの研究会 News をご覧ください。

研究会ホームページアドレス
<http://jspon.sakura.ne.jp/>

平成20年度 役員名簿

1. 役員会

会長： 梶山祥子
 副会長： 丸光恵、門倉美知子
 幹事： 内田雅代(庶務)
 石川福江(会計)、井上玲子(会計)
 小原美江(研究会)
 小川純子(機関誌)、小原美江(機関誌)
 富岡晶子(広報)、前田留美(広報)
 監事： 石橋朝紀子、森美智子、塩飽仁

2. 委員会

研究委員会： 内田雅代、小原美江
 研究会誌編集委員会： 野中淳子、森美智子、米山雅子
 研修委員会： 梶山祥子、浅田美津子、竹之内直子、小川純子
 NPO 法人化準備委員会： 丸光恵、塩飽仁、前田留美、梶山祥子
 国際交流推進委員会： 丸光恵(Cancer Nursing, APHON)、梶山祥子(SIOP)

日本小児がん看護研究会機関誌担当

淑徳大学看護学部 小児看護学 小川純子
 千葉県こども病院 看護部 小原美江

【連絡先】

〒260-8703 千葉市中央区仁戸名町673
 E-mail: junogawa@soc.shukutoku.ac.jp
 (小川)



日本小児がん看護研究会は、会員数400名を超え、今後の研究会事業をより充実させていくために、NPO 法人日本小児がん看護学会として申請することを検討しております。11月15日(土) 幕張メッセ国際会議場にて開催いたします総会では、NPO 法人設立についての議決を行います。是非多くの方からご意見を頂ければと思いますので、ご参加をお願い致します。

尚、NPO 法人設立に向けての定款案は、研究会のホームページにて閲覧が可能です。ダウンロードのメニューから選択して、総会前にご確認頂けると幸いです。

今回のニュースレター第8号では、第6回日本小児がん看護研究会のプログラムのお知らせ、第5回小児がん看護研修会の報告を致します。

第6回日本小児がん看護研究会について

秋も深まり、いよいよ第6回日本小児がん看護研究会開催(幕張国際会議場にて)が間近となりました。多くの方々のご支援を頂きながら準備進めてまいりました。がんの子どもへのケアに携わる皆さま、教育の現場の方々などさまざまな領域の方と意見交換を行い、今後のケアへ活かせる学会にできればと考えております。

多くの皆さまの、ご参加をお待ちしております。プログラムの詳細、抄録をホームページへ掲載いたしましたのでご覧ください。

(第6回小児がん看護研究会 会長 吉川 久美子)

平成20年11月15日(土)

教育講演

9:10-10:40 教育講演1

家族と共に過ごす時間—在宅ケアの実例—
 押川真喜子(聖路加国際病院訪問看護ステーション)

14:30-16:00 教育講演2

小児のエンドオブライフケアに関わるスタッフのソーシャルサポート 保坂隆(東海大学医学部)

ワークショップ

10:30-12:00 ワークショップ1 きょうだいへの支援
 13:00-14:30 ワークショップ2 感染管理

一般演題

10:40-11:10 第1群 疼痛ケア
 11:10-11:50 第2群 終末期ケア
 13:00-13:30 第3群 看護師への教育支援
 13:30-14:10 第4群 看護ケアとチーム医療

16:10-16:50 第5群 家族に関するケア

ポスター発表

16:00-16:50 ポスター 食事
 16:00-16:50 ポスター 終末期ケア・感染管理
 16:50-17:30 ポスター 看護ケア

総会

17:15-17:45

NPO 法人日本小児がん看護学会登録申請に向けて

平成20年11月16日(日)

公開合同シンポジウム

9:00-12:00 治すのが難しくなったら・・・

一般口演

13:00-13:40 第6群 学童・思春期のケア

ワークショップ

13:40-15:10 ワークショップ3 復学への支援

+++++

第5回小児がん看護研修会の報告

2008年8月30日(土)、成育医療センターを会場に「長期フォローアップの現状と展望～看護の役割を考える～」のテーマで開催されました。週末で天候の悪い中でしたが、127名という多くの方の参加がありました。3人の講師の先生方にご講演頂き、午後は「外来における小児がん看護の現状と課題」についてシンポジウムを行いました。

講演

上別府圭子先生は、北米の大規模な小児がん経験者の研究(CCSS: Childhood Cancer Survivor Study)の報告と日本における小児がん経験者の全国規模のプロジェクトの試みの紹介や、先生が日本語版を開発された Pediatric Quality of Life Inventory(Peds QL)についてご紹介いただきました。さらに、研究結果をもとに、小児がん経験者や経験者のきょうだいにおける心理社会的な問題についても、お話いただきました。研究データに基づいた説得力のある講演でした。特に、Ped QL は、2歳から18歳の子どもに使用可能なスケールであり、Generic Core Scale に加えて、Cancer Module, Brain Tumor Module, Pain

Questionnaire, Fatigue Scale などがあるとのご説明を頂き、臨床での活用の可能性を感じました。

塩飽仁先生は、16年間続けてこられた「看護外来」の中での、小児がんの子どもと家族との関わりについてご紹介いただきながら、長期フォローアップにおける看護の役割についてお話下さいました。子どもや家族との具体的な実践を交えてのお話であったので、参加者にとって看護師の役割がイメージしやすかったと思います。小児がんの子どもと家族は発症から入院、外来治療、そして長期フォローアップと、長期間に渡り病気と闘い、そして病院と関わりを持ち続けていきます。そのような中で、看護師が継続的にまた様々な関連職種と連携をとりながら子どもと家族と関わる大切さを改めて実感しました。現在は看護外来としての診療報酬は認められていないので、今後に向けての課題であるとの意見も出ていました。

石田也寸志先生は、小児がんの晩期合併症の実態や、長期フォローアップの必要性、問題に加え、JPLSG(Japan Pediatric Leukemia/Lymphoma Study Group)長期フォローアップ委員会の取り組みについてご講演されました。小児期に罹患した患者が、成人になっても長期フォローアップを継続出来るように、生活の場が変わっても、同じような医療や看護を受ける為にも、患者自身が自分の受けた治療に関して詳細に記した治療サマリーを保持していることは大切だと感じました。さらに石田先生は、長期フォローアップにおける看護師の役割の重要性についてもお話されました。現在は身体的な問題や治療についてのみ記載されている小児がん経験者の治療サマリーですが、これから看護師も参画し、病名や病気に関して説明された内容や心理社会的な特徴についてもフォローしていく必要があると思いました。

シンポジウム

午後のシンポジウムでは、まず小児がん経験者の高品亮介氏のご自分の体験から、社会復帰をする際の問題点と、患者の立場からのフォローアップの必要性についてお話下さいました。治療による体力の低下に加え、復学や復職などの社会復帰をした際の体調管理や外来通院の調整などの難しさや、進学や就職への影響、成人になってからの治療費の問題などのお話がありました。また、だれに相談するのがよいのかが分からなかったり、自分の今までの治療経過を知らない人には相談しにくいなどの問題点もだされました。

次に3人の小児専門病院の看護師が、それぞれの病院の現状と課題について発表されました。神

奈川県立こども医療センターの仲上氏は、病棟と外来の継続看護や、看護外来における子どもや家族との面談について話されました。また、復学における学校との連携や終末期を在宅で過ごす子どもの緩和ケアの問題などが難しいと話されました。千葉県こども病院の平塚氏は、外来における苦痛を伴う検査や処置への関わりや、初回外来に向けての退院前の外来看護師による病棟訪問などについて話されました。また、発達を見越した予測的な関わりや、今後成人特有の問題が出てきた場合の成人病院との連携の不足などが問題として挙げられました。

静岡県立こども病院の中澤氏からは、2007年9月から始まった小児がん長期フォローアップ外来について紹介がされました。①構成メンバーは、血液腫瘍科、循環器科、内分泌科の医師と看護師、医療秘書の5名であり、治療集終了後1年を経過した患者を対象にしている。②来院時には血圧や体重、体脂肪などの計測と心電図/心エコー、レントゲン、採血、そして各診療科の医師による診察と看護師の面談を行う。③診療後、関係者でカンファレンスをもち結果を本人に郵送する、という形でフォローしているとの説明でした。フォローするにあたり、患者自身が自分の病気や晩期合併症に関してどのような知識をもっているのかを把握していくことが大切だと話されました。



アンケート結果

長期フォローアップは主として、外来における関わりとなるため、病棟で働く看護師の方の興味関心がどのようなものか気になりましたが、参加者へのアンケート(回収67名)では、約60%の方が研修の無いようについて、「非常によい」あるいは「良い」と答えていました。特に、経験者ご本人のお話や、各施設における現状の報告などから学ぶことが多かったようです。

今後希望するテーマについては、家族への看護、ターミナルケア、心理社会的な問題、プリパレーション、小児がん経験者へのヘルスプロモーション

など様々な意見がありました。多くの方の意見で共通していたことは、経験者本人や、ご家族、きょうだい、学校の先生などからの話を聞く機会をもちたい、という希望がありました。皆様のご意見を参考にさせていただき、次回の研修会のテーマを検討していきたいと思います。

(小川)

ANR(Advances in Neuroblastoma Research) 2008 参加報告

去る5月21日～24日に幕張国際会議場にて、ANR 2008が開催されました。今年は、学会長の中川原先生のご意向で、看護師の参加・発表が認められ、日本から3題、台湾から1題、計4題の発表がありました。さらに看護師独自のミーティングも開催され、台湾やネパールからの看護職とそれぞれの国における小児がん看護の実践について情報交換をすることができました。ネパールでは、「小児がん」という疾患そのものに関する国民の理解度が低いため、家族が病院に連れてこなかったり、連れてくるのが遅れてしまう現状があるということでした。台湾では、神経芽腫の子どもをもつ家族のサポートグループを初めて設立したとの紹介がありました。小児がんの中では、白血病のこどもの数が多く、また治療施設も多い為、小児がんの子どもへの看護イコール白血病の子どもへの看護となりがちですが、固形腫瘍は血液腫瘍と異なったケアが必要なこともあるため、固形腫瘍に特化した看護の検討も進めていく必要があると感じました。さらに、24日に開催された「小児がん公開国際シンポジウム 2008 ～地球規模の小児がんケアとキュア“未来への架け橋：先進国・途上国の治療現状と小児がん経験者たちの声”～」は、約300人の参加者があり、大変盛況でした。第1部の「ドクターからのメッセージ：キュアにむけて」では、フランク・ベルトルド先生(ドイツ)と石田也寸志先生より、小児がんにおける最前線の治療と長期フォローアップについてお話がありました。さらに、プルナ・クルクレイ先生(インド)とタイ・ヴィエット・トゥアン先生(ベトナム)より、アジアの発展途上国の現状について話されました。第2部では、フィンランド、カナダ、フィリピン、日本の小児がん経験者からのメッセージが伝えられました。国内の13のセルフヘルプグループの活動ポスターなども紹介されており、小児がん経験者達がお互いに

サポートしながら前向きに生活している様子を知ることができました。(小川)



SIOP 2008-ドイツ・ベルリン参加報告

今年は、9月28日に出発し、オランダでの1日観光、2日間の研修には7名が、SIOPには11名の看護師が参加しました。参加者の中に、2名の臨床で働く看護師がいたことは、これからの看護実践の発展に大変心強いと感じました。日本からの看護師の発表は、オーラル1題、ポスター4題の計5題でした。

学会前の研修:9月28日～10月2日

オランダでは、アムステルダムにある Emma Children's Hospital Academic Medical Centre Amsterdam で研修をしました。オランダでは、小児がんのこどもの治療をする病院はセンター化されており、7つの国立病院で行われています。オランダの小児腫瘍グループ SKION は、医師、看護師、心理学者、統計学者、研究者などで構成されているというお話でした。研修は、小児腫瘍科のリサーチナースである Nelia Langeveld 氏がコーディネートしてくれました。オランダの小児がんの看護の現状や緩和ケア/訪問看護、そしてソーシャルワーカーやチャイルドライフスペシャリストの活動などについて学ぶことができました。さらに、エビデンスに基づいたケアとは何かについて、nurse researcher から話を聞いたり、感染予防の観点からの薬の扱い方に関して成人のがん看護をしている看護師と小児がん看護を専門に行っている看護師との共同研究についても話を聞くことができました。

オランダの治療も、イギリスやアメリカと同様外来治療がメインでした。そのため、小児がんのこどもの6割から7割が栄養チューブを入れて入院し、栄養はチューブから入れることが多いとの話を聞き、治療の場が異なると必要なケアにも大きな違いがでると感じました。

SIOP:10月3日～8日

SIOPは、看護職、医師、経験者、親の会のミーティングが並行して開催されています。私達は、開会式から参加し、それぞれが看護のミーティングを中心に興味あるセッションに参加しました。